R7 楡木小学校　学校通信
No. 5

なりたい自分になる！

In 楡木サラダボウル

令和７年５月２日
文責　余宮

ようやく初夏のにおいがしてきましたね。いや、暑いくらいか…季節がわかりにくいと感じる今日この頃です。

るつぼではなく「サラダボウル」

１年生給食２日目。その日のメニューは「スパゲティミートソース」学校給食定番のおいしいメニューですね。初めての「スパゲティミートソース」に、１年生のお子さんたちの反応が気になります。ちょっと教室をのぞいてみましょう。

「おいしそうなパスタだ。私は絶対におかわりをするんだ！」

おっと、すぐに聞きなれない言葉が聞こえてきました。今日の給食の話だよね？

「私も、パスタをおかわりするつもりです。だって、ミートソースが大好き」

あれ？また聞きなれない言葉が出てきた。なるほど、合点がいきました。１年生にとって、あのつるつるとした赤い麺類は、スパゲティではなくパスタ。これは、時代の違いかもしれません。もうちょっと、深堀してみましょう。この麺はパスタっていうんだよね。

「そう、パスタ。お家でもパッケージにパスタって書いてあるもん」

「〇ョリーパスタ、ってお店で食べたんだよ。メニューにもパスタってあったよ」

時代の違いだけではなく、それぞれの経験や大切にしている信条、家庭環境など様々な違いが言葉の違いに現れます。

日本人はこのような違いにあまり寛容ではない、と言われることがあります。身の周りにいる人は、一見すると大きな違いがみられない島国に育ったことが原因と言われることも。四の五の言わずに空気を読みなさいよ、言わなくもわかるでしょ。こんな感じかな。

視点をアメリカ合衆国に変えてみると、そういう訳にはいかない。建国当時から、たくさんの人種、たくさんの信条が入り乱れる多民族国家が、アメリカ合衆国の特徴です。だから、アメリカ合衆国は建国当時、様々な民族が解けて混ざり合い、一つのアメリカ人を目指したとのこと。その様子を表した言葉が「人種のるつぼ」。私が中学生当時、社会の教科書で「この言葉、大事だぞ～」と当時の先生から言われたことを思い出します。

時代が過ぎ、この言葉に違和が叫ばれ始めたのが公民権運動（その中心人物がキング牧師）です。「るつぼ」は、少数派に対して多数派から「俺たちみたいになれ！」との同化を押し付けられた言葉だととらえられたのです。改めて「るつぼ」を調べてみると、高熱を利用して物質の溶融・合成・保温を行う際に使用する耐熱容器でした。確かに、言葉の意味からすると高圧的な融合を促している、ととらえられる面もあるのかな。

そこで、マイノリティーを尊重し、多文化共生のグローバル社会を目指して「るつぼ」の替わりに生まれた言葉が「サラダボウル」なのです。トマトやキュウリなど、それぞれの形も色も、そしておいしさや栄養も各々の個性を残しつつ、なおかつ全体でもおいしい「サラダボウル」こそが、目指すべき共同体の姿ではないか、と。

翻って、私にとっての「スパゲティ（もしくはナポリタン。あれ？誰も知らない…）」は、１年生の子どもたちにとっては「パスタ」。この問題を解消するためには・・・

もっともっとお互いを知りたい。もっともっとあなたに関心がある。だから、もっともっとあなたと共に活動したい。そんな他者へのコミットメントこそが、「サラダボウル」には不可欠なのかもしれません。ところで、パスタとスパゲティの違いって何だろう？